

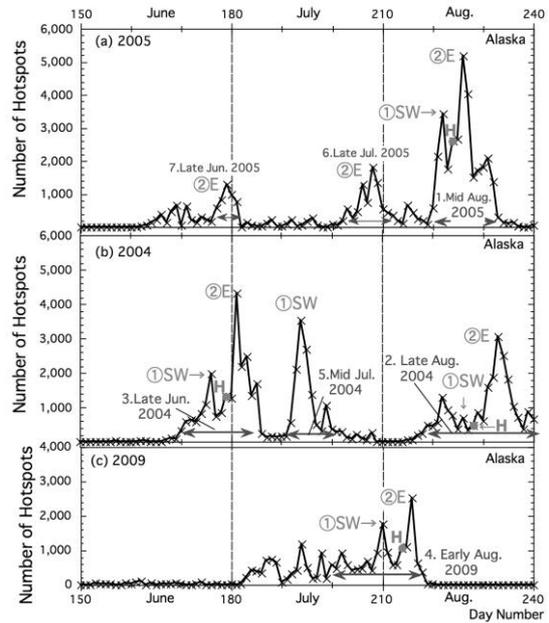


1. **1** HS
 2004,2005,2009 7
 2004,2005 HS
 100
 NASA (SW)
 (E) 7
 MODIS (4
 HS) 2 HS SW E

(500hPa) (1000hPa)
 (RWB)
 (BSH)

2. **2**

MODIS (HS : 7
) 4
 HS HS 300 (1000hPa) (500hPa)
 2002 12 2(1) SW



(図 2(2)、②E)が確認できた。地表付近の等圧面図では、高気圧の南(図 3(1)、①SW)から北(図 3(2)、②E)への移動が確認できた。これらの高層と地表付近での気象現象から、偏西風が蛇行し、ロスビー波砕波(RWB)現象(図 4 参照)が生じた、と判断できた。

最も激しい火災期間での地上気象デー

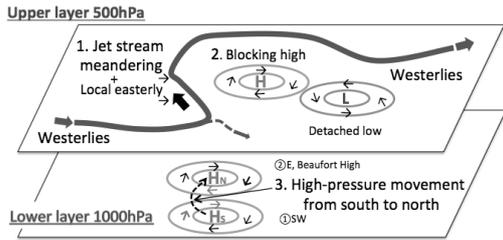
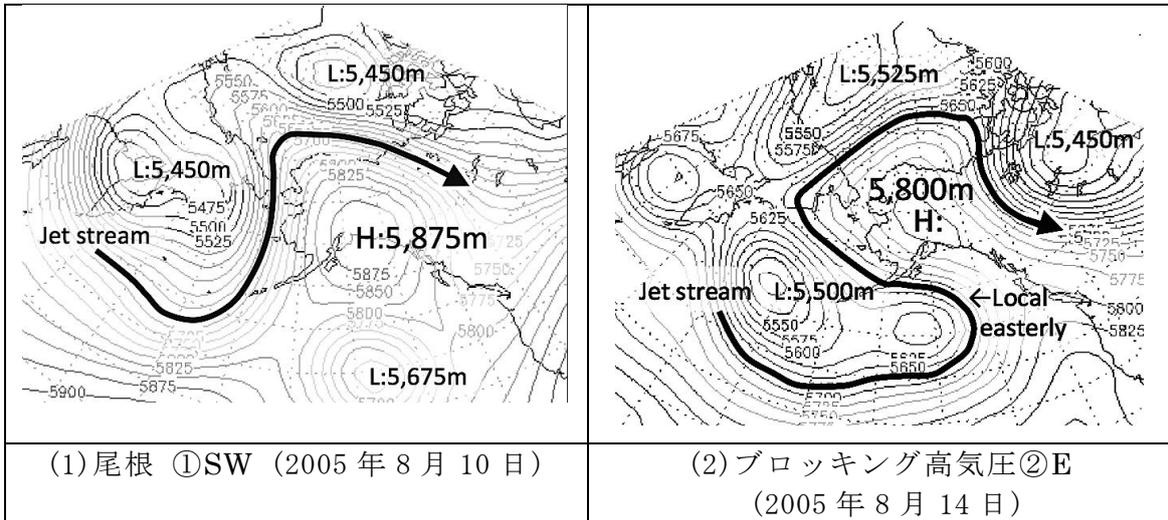


図 4: ロスビー波砕波(RWB)現象

タは、RWB 現象下での南方生まれのポーフォート海高気圧(BSH)からの昼夜を問わず 30 時間ほど連続して吹き込む、東寄りの強風 (平均速度 5ms^{-1} 以上、最大瞬間風速 12ms^{-1}) の存在が確認された。BSH による局地風が激しい火災を引き起こしていることを明確にした。

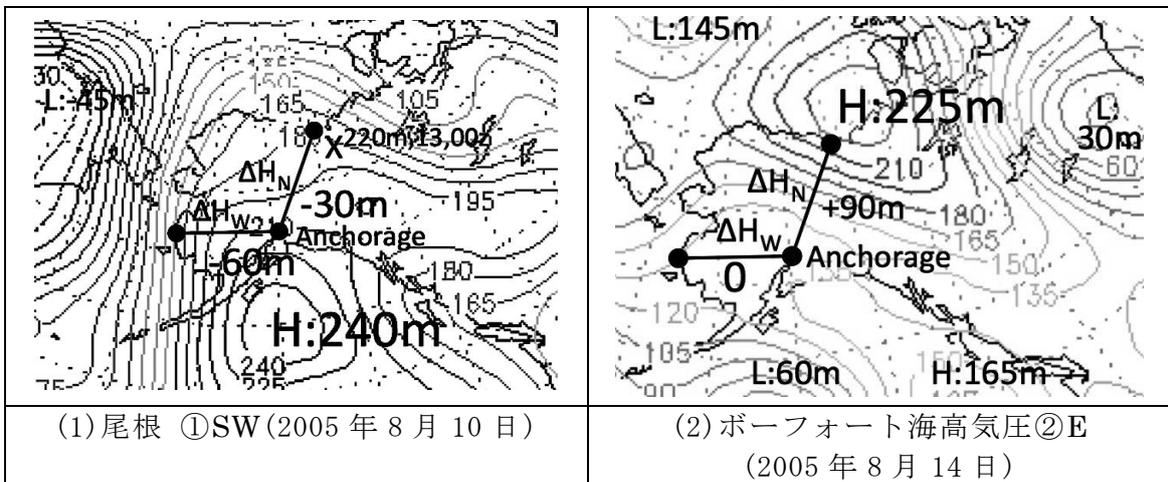
この他の結果は、上位 5 の火災は、北極海の低気圧による①SW で生じた。7 火災期間は全て高気圧下の条件でおきた。上位 6, 7 の火災でも BSH の存在が認められた。本研究の結果から、アラスカの火災体制 (fire regime) がより明確になった。さらに、アラスカの地形はアラスカの火災体制との関連性が示差された。



(1)尾根 ①SW (2005年8月10日)

(2)ブロッキング高気圧②E (2005年8月14日)

図 3 高層図等圧面図 (500hPa)、ジェット気流のおおよその位置を 5,675m の等高線を太くして示してある。



(1)尾根 ①SW (2005年8月10日)

(2)ポーフォート海高気圧②E (2005年8月14日)

図 4 地表付近の等圧面図 (1000hPa)